

俱会一处、浄土で再会

震災で逝った肉親想う

浄土真宗本願寺派の総務を務める豊原大成氏（六五）は、昨年一月十七日の早朝に発生した兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）で兵庫県西宮市の自坊、西福寺の庫裡と書院が倒壊し、父の大潤氏（元同派総長）、夫人の幸子さん、そして一人娘の真利さんの家族全員を喪った。震度7の激震が近代都市を襲ったこの未曾有の大惨事の犠牲者は五千人を超え、各々の遺族らは掛け替えの無い大切な人達の思い出を胸にこの一年間を生き抜いたが、豊原総務もそうした遺族の一人である。瓦礫の下から発見され本堂に安置された三人の遺体を見て「悲しみというより悪いことをしたという気持だった」と語る同総務に、間もなく迎える一周忌を前に浄土へと還った三人への思いや、仏教者として今回の出来事をいかに受けとめたかなどを聞いた。

本願寺派 豊原大成総務に聞く

－震災の時に総務は京都の役宅におられたのですが、あのような自坊の惨事は思いもよらなかったのでは。

豊原大成総務 最初はテレビニュースで阪神地方も京都と同じ震度5と出ていた。この老朽化している役宅が大丈夫なら寺も心配はないだろうと思いました。まさかあんなことになっていようとは夢想だにしませんでしたね。

－知らせはどのようにして届いたのですか。

豊原総務 本山に出勤して電話で阪神・淡路地方の寺院の安否を確認しようとしたのですが、なかなか電話が通じない。やっと通じた同じ組内の善教寺（赤井秀顕住職）さんは「本堂が傾いて鐘楼や山門は倒壊した」という。赤井住職が「西福寺さんはどうなのですか」と尋ねるので「まだ電話が通じません」と答えると、「見てきましょう」とおっしゃって下さったのです。

約一時間後、午前十時頃でしたか、赤井住職から電話が入り「書院と庫裡が倒壊しています」と知らせて下さった。そして、この後すぐにお手伝いさんが電話口に出て泣きながら「大変です」と言ってきたのです。

－それからすぐに本山の職員の運転する車で自坊に向かわれた。神戸へ向かう道は大変な渋滞で自坊に到着されるまで七時間もかかったそうですが、この間は本当に辛く苦しい時間だったのでは。

豊原総務 ラジオでニュースを聞いていました。次々に増える犠牲者の中に家族の名前は無かった。しかし、庫裡と書院が倒壊しているのだから……。まあ最悪の場合もあるとは覚悟はしていました。

－自坊に到着された時には三人のご遺体が既に本堂に安置されていたのですね。

豊原総務 昼頃に瓦礫の下から発見されたそうです。遺体を見た時も、覚悟はしていたので呆然と立ち尽くすことはなかったと思います。

父は顔に少し傷がありましたが、坊守は別に傷もなくまるで眠っているような状態でした。また、娘は体に少し動きがあるようでしたが、「これはおそらく逃げようとしたのだな」と思いました。

－家族全員を一瞬にして失ったという事実を前に、最初に胸中に去来した感情は。

豊原総務 悲しいというより悪いことをしたなあという気持でした。もう少し三人を幸せにしてやれば良かったと後悔の念にかられました。

父は晩年足が弱くなってからかえって外へ出たがりましたが、私は車も運転しませんし、忙しくて連れて出てあげることができなかった。いつも弟が代わりにやってくれていました。坊守もリウマチで手足が悪かったのですが、旅行が好きで姉や友人と行っていました。彼女にしてみれば私と行きたかっただろうが、夫婦二人ともが寺を空けることはできないのです。

それに娘には、結婚して子供を産んでという女性としての幸せを味わわせてやりたかったという思いですね.....。

－震災直後、大変気丈に弔問者らに應對されていた姿が印象に残っています。やはり、宗教者としての自分がその根底にあったのですか。

豊原総務 仏教や真宗の教えが心の支えになったというか、仏教でいう諸行無常、老少不定－それがこういうことなのかと思いました。

私は大学で仏教学を学び、真宗僧侶としても真宗の教えを多少なりとも学んできた。僧侶としてはご門徒の方々にそのような教えを説いてきたわけですが、今まで説いてきた仏教、真宗の教えの一つ一つを今回の震災で確認させて頂いた、仏教の復習をさせて頂いたのだと思っています。

浄土真宗の正依の經典である『大無量寿經』の、三毒段、五悪段－ここに説かれている世の姿などはもっとひどいですよね。家族同士がいがみ合い憎しみ合って、いっそのこと居ない方がましだと。

私達の家族はそういうことはなかった。ある日突然に三人の家族が亡くなってしまったが、生きているうちはみんな仲良くいたわり合い暮らさせて頂いていましたから。

－近く大潤元総長の追悼文集が出版になり、総務も一文を寄せられるそうですが、父の大潤氏のことで特に印象に残っていることは。

豊原総務 総長としての父は次々仕事を処理していかなばならない立場でもあって厳しい一面を持っていましたが、自坊ではもう少し優しい存在だったと思います。滅多に声を荒らげ叱責されたことはなかったのですが、私が新婚間もない頃に一度だけ大変怒られたことがありましたね。

『追悼文集』にも書いていないことですが、在家から寺に入った坊守は慣れないこともあって新婚早々の暮れから高熱を出し、正月三が日の法要が済んだ後に私が実家へ送って行ったのです。ところが、私は常に忙しくしていないと駄目な性質で、坊守の実家で何もしないでいたら病気になり、御正忌報恩講の初日に自坊に戻れなかったのです。

すると、父が自坊に戻った私を呼びつけて「御正忌を一体何と心得ているのか」と厳しく叱りつけました。後にも先にもあれほど怒られたことはなかったですね。

－大潤氏は総務、総長として常に宗門運営の重責を担い、晩年まで宗門に対する愛着を持ち続けておられましたね。

豊原総務 亡くなる前夜も京都に戻る私に向かって「ご本山はうまくいっているのか」と声をかけていましたが、これが私にとっては父の最後の言葉となりました。そして、後から聞いた話なのですが、亡くなる当日に実はご本山にお参りさせて頂こうとしていたそうです。結局、それは果たせぬままに亡くなってしまったのですが.....。

親鸞聖人の御苦勞思えば

教区復興に取り組む

－自坊の復興も大変でしょうが、総務は兵庫教区全体の復興を考える立場で、これは相当の難題ですね。

豊原総務 震災の後、いくつかの寺院にお見舞いに伺わせて頂いたのですが、住職の中にはかなり高齢の方もいらっしゃるので本当に大変だろうと思います。また、被災寺院も被災の状況が千差万別です。中には寺院が借地に建っていたために、これが区画整理にかかってしまって再建しようにも土地が無いといった難問にぶつかって途方に暮れておられる所もあります。

この前にある住職と話していたのですが、一つの考えとしてですね、宗派を問わずに被災した寺院が何か寺か集まって土地を取得し、「寺町」の形態を採って再建するのはどうかと思うのです。神戸市内の寺院は、ご門徒がお寺にお参りするよりも、専ら寺院の住職が各々のご門徒や信者の家に出向かれている場合が多いので、少々寺院が遠くてもご門徒や信者は不便になるということはない。

しかし、寺院にとってはご門徒の多くが被災して離散してしまっている場合もあり、このようなケースは別の方策を考えなければならない。

本当の意味での復興には、十年、二十年という長い時間が必要になるでしょうが、なんとしてでもこれは達成しなければならない課題だと思っています。

－今回の震災は、総務の今後の人生にとって大きな影響を及ぼしていくことになると思いますが。

豊原総務 こう言うと叱られるかもしれませんが、ある意味では楽になったなあと思うのです。子供や孫の心配をしなくても済みますから。

－しかし、それはとても寂しいことでは。

豊原総務 先ほど仏教の復習をさせて頂いていると言いましたが、お釈迦様はどうだったかと考えてみますと、お釈迦様には孫はいなかった。私はよく何かがあった時にお釈迦様や親鸞聖人はどうだったかと考えることにしています。お釈迦様や聖人のご苦勞を思えば、とね。

－寺院の後継者の問題もありますが。

豊原総務 種の保存はあらゆる生物の本能であり、その点では残念だと思います。でも、そういう人は私一人ではないわけで、まあ仕方がないと思っています。「命長ければ恥も多し」というが、これからは年老いても周囲の人達にあまり迷惑をかけることなく生きていくことができればと願っています。それに、お世話になった多くの方々に少しでも御恩返しをしたい。

－真宗には「俱会一処」といって、この世で死に別れても弥陀の浄土で再び巡り会うのだ、といいます。総務も亡くなられたご家族とお浄土ではお会いになれる……。

豊原総務 ぜひ会いたいと思います。特に人生これからという時に突然の災害で若い命を奪われてしまった娘には、娘には……。

豊原大成氏 [写真は省略]

瓦礫の山となった庫裡、書院。この下敷きとなり三人が亡くなった [写真は省略]
